



演奏者より

学院オルガニスト ジェームス ドーソン

ご存知の方も多いと思いますが、灰の水曜日に始まる大齋節は、復活日の前の40日間です。大齋節は祈りの時であり、多くの人にとって自己犠牲と内省の時でもあります。教会では大齋節の間に使われる音楽は真面目な響きのものが多く、シンプルで黙想的なものが多いです。大齋節の音楽は短調で書かれているものも多くあります。大齋節の間はオルガンを使用しない宗派もありますが、このことは特に厳かな雰囲気醸し出し、復活祭の朝に再びオルガンが演奏されることにより強いコントラストが生まれます。

鈴木裕二司祭のご協力のもと、受難節のための音楽と、灰の水曜日に伝統的に朗読される詩編51編からの詞で綴る、「大齋節のためのオルガンによる黙想」を皆様にお送りします。前回のオルガンコンサート「新年を迎えて」と同様に、再びバッハの音楽で始まり、バッハの音楽で終わります。バッハの曲の間に、詩編51編を引用したドイツの賛美歌「Erbarm dich mein, O Herre Gott（おお主なる神、我を憐みたまえ）」を基にした4つの作品を演奏します。作品と作品の間には鈴木司祭が詩編を朗読します。

最後のフーガの前に、バッハの感動的な「O Mensch, bewein' dein Sünde groß（ひとよ、汝がつみの）」を演奏します。この曲は、大齋節の終わりの聖金曜日に伝統的に歌われていた賛美歌を基にしています。

なお、このコンサートのプログラムノートが、「チャペルニュース131号」（2021年3月11日キリスト教センター発行）の『チャペル音楽活動』に掲載されております。冊子をお持ちの方はこちらで曲ごとの解説もご参照いただけます。

